www.wako.ac.jp/organization/gender/
GFS.

vol. 32
2021年3月発行

GF ジェンダーフォーラム通信
GENDER FORUM PRESS

和光大学 ジェンダーフォーラム 〒195―8585 東京都町田市金井ヶ丘5丁目1番1号 和光大学ジェンダーフリースペース（G112） TEL 044―989―7777 内線4112 gen-free@wako.ac.jp

EVENT

オンライン講演
「和光大学ジェンダーフォーラム― 発足過程とその後の展開」

2020 年 7 月 28 日、表記の講演会を開催した。青山学院大学が、新規にジェンダー関連機関を開設するに当たって、他大学の先例を知りたいとの要請を受けたためである。

話題は、Ⅰ前史　Ⅱジェンダーフォーラムの発足　Ⅲ2012 年度以後のジェンダーフォーラムの 3 部構成とした。以下に内容を要約してみる。

Ⅰ 1995 年に発足した教員グループ「フェミニズム・ジェンダー研究会」が、ジェンダー関連機関設置の必要性を訴え、2001 年から、G 棟 1 階にジェンダー・フリー・スペースを開設した。大学の構成員（特に学生）がジェンダーの知識と認識を獲得し、エンパワーメントできるための場所と情報の提供をめざして、講演会、パフォーマンス、ワークショップ、講談、展示、メディア＆トーク等々、様々な活動をおこなった。だが、10 数人のボランティア教員とアルバイト・スタッフによる運営には、限界があった。

Ⅱ 2007 年度から、大学の学則に基づく正規機関として、ジェンダーフォーラム組織が再発足し、従来からの活動拠点をジェンダー・フリー・スペースと呼ぶことになった。活動形態は従来とほぼ変わらなかったが、内容的にはより充実した展開が出来た。また、①資料の蓄積、教員間交流などによるジェンダー関連授業との連携、並びに②専門スタッフの常駐、情報提供などによる、学生にとっての相談補助機能など、規程以外の副次的機能を果たしてきたことも見逃せない。

Ⅲ当初から中心的役割を担ってきた井上が退職した 2012 年以後、ジェンダーフォーラムは、①ジェンダー・スタディーズ・プログラム等、ジェンダー教育の推進主体の役割を追加した。また②地域連携研究センターの 1 組織として、学外に開かれた活動を展開しているが、井上主催になる、学内外の幅広い社会人たちによる読書会活動も，その一環と言える。

以上の講演動画は、現代人間学部杉浦郁子教授によって、大学 HP にアップされているので、詳しくはそちらをご覧いただきたい。

現役時代はもちろん退職後も、私は大学の授業期間中は、原則として週 1 回はジェンダー・フリー・スペースに足を運んできた。研究会活動等のほか、飲食しながらの雑談を通じて、利用者たちと親しくなるだけでなく、新たな企画のアイデアも生まれてきた。

パンデミックの中で、読書会もオンラインでしか開催できなくなった今、実際に顔を合わせて交流し合うことの意義を、改めて痛感している。少しでも早くコロナ禍が終息し、ジェンダーフォーラムの活動が再開されることを待ち望んでいる。

（**井上輝子**・本学名誉教授）

▲「モノに見る女／男2004」［図書館（現図書・情報館）梅根記念室］

COLUMN

コロナ禍における
ジェンダー・フリー・スペースとGF読書会

世界中が、感染症による不幸に見舞われた2020年。私たちジェンダー・フリー・スペース(以下GFS)も、その影響を受けました。GFSは、みんなが集まるための場所ですが、それができないパンデミックの時世にどうふるまうべきか。想定さえもしていませんでした。あまりの展開に対処が追い付かず、前期の全ての日程に対して「閉室」を余儀なくされました。さらに、後期は感染対策をした上で時間枠と人数制限を設けた「完全予約制」としましたが、ほとんどの授業がリモートで行われる中で、GFSが「開室」していることへの周知の徹底がなかなか難しく、これといった動ができぬまま年度を終えることになりました。感染予防を念頭にした策をあれこれと講じながらも、時間だけが過ぎていきました。とてもふがいなく残念に思います。

半面、GF読書会は、年度当初にコロナ禍での活動について、メンバーがメールで話し合い、一年をかけてエッセイ集を編纂することになりました。前期は各自が原稿を執筆し、後期は週一回のリモート読書会において、書き上げた作品について皆で語り合いました。直接会えない寂しさはありましたが、個性豊かなエッセイに対して、とても活発で有意義な意見交換がなされたと感じています。また、リモート読書会の毎回の出席者数は、昨年を上回っていました。読書会メンバーは全員が社会人であり、比較的高齢の方もいらっしゃいます。都心からも駅からも遠い本学へ出かけるためには時間の調整やそれに伴う体力も必要ですが、リモート開催はこうした面がいくらか緩和されることを知りました。2020年度のリモート読書会は、新たな読書会のありかたを考えるきっかけになったと思います。なお、このエッセイ集は、この号と同時に発行されました。秀作・力作ぞろいのすばらしいエッセイ集です。ぜひご一読ください。

GFSの責務はみなさんに居心地のよい場所を提供することですが、予期せぬ出来事は起こります。その時の対処方法をあらかじめ考えておくべきだったと反省しています。そして、GFSのこれからを真剣に考えなければならないと痛切に感じた一年でした。

（阿野理香・ジェンダーフォーラムスタッフ）

▲ 飛沫防止シートで感染対策をしたGFS

GF EVENT

2020年度
デートDV防止啓発講座

2020年11月4日（水）、共通教養科目「法と人権」（田中美里先生担当）の授業内で、デートDV防止啓発講座「これってデートDV？」を開催しました（町田市男女平等推進センター主催・和光大学ジェンダーフォーラム共催）。

NPO法人レジリエンス代表の栄田千春さんを講師としてお迎えし、栄田さん作成の動画を視聴するというオンデマンド形式の講座でした。この授業を履修していない和光生の受講も、申し込みにより受け付けました。

講座では、栄田さんから「暴力被害・加害を目撃したとき、もしくは相談されたとき、今後あなたはどのような対応を取ることができますか。具体的に挙げてください」という問いかけがなされ、約200名の受講者から回答が寄せられました。

先日、齋藤梓・大竹裕子編著『性暴力被害の実際――被害はどのように起き、どう回復するのか』金剛出版（2020）を読み、性暴力被害者に「被害認識」を形成させ支援につなぐ身近な相談相手の重要さを知りました。栄田さんからの問いかけに応じ「自分が相談されたらどうする？」と考えを巡らせた人が増えることで「性暴力に寛容な日本社会」が少しずつ変わっていくのではないか――受講生からの回答を読みながら、こんな期待がふくらみました。

（杉浦郁子・現代社会学科）

＜受講した学生の回答を紹介します＞

まずは、☆さんの思いを理解してあげたいなと思います。自分自身、「被害者にも悪い部分はある」と考えがちなときもあり、「自分から行動しなきゃ何にも変わらないじゃん」みたいな言葉を放ってしまうかもしれないなと思いました。☆さんの言動の裏にある真意を考えてみたり、その思いや考えを受け止めていくことが、その人の気持ちをわかってあげられるきっかけになると思いました。話を聞く態度や姿勢、

言葉がけに配慮しながら、☆さんの助けになりたいなと考えさせられる内容でした。「あなたは悪くない」その一言が被害者の心を救う大きな一歩になるのですね。

また、信頼できる大人に相談するということは心に留めておきたいなと思いました。自分たちだけで解決できないことも多いと思いますし、「誰にも言わないで」と言われてしまったらたしかに、「わかったよ」と言ってしまうかもしれないなと思いながら聞いていました。助けになってくれる人の存在が、☆さんや自分の安心感につながり、一緒にできること、助けられることの幅も広がっていくのだと思います。地域や専門の相談窓口を活用したり、☆さんのSOSに寄り添えるような考えが、正しい知識として、実際の被害者を助けられるのだろうと感じました。

（五十嵐健心・現代人間学部 心理教育学科 子ども教育専修 初等教育課程 1年）

注）NPO法人レジリエンスでは、性暴力被害者のことを「☆さん」と呼んでいます。

GF EVENT

卒論･卒制発表会報告

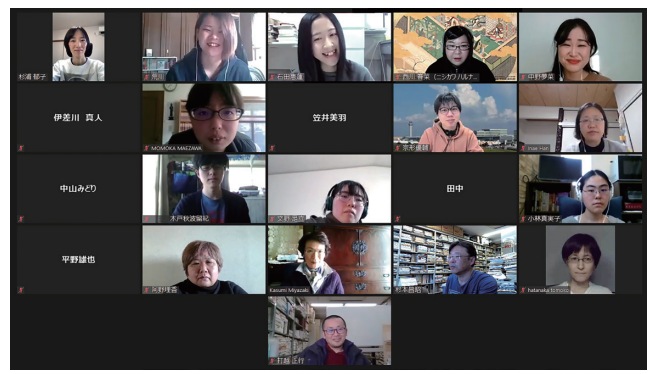
月白の肌が無彩色の背景に溶け込んでいきそうな、それでも絵元にとどまって、身体が輪郭を維持しうるのは、女性になっていくこと、それにともなって心に嵌め込まれる軛やまとわりつく淫猥な視線といったしがらみへの厭いを作因としているからであり、構図に動きはなく、息遣いも聞こえず、しかし、みずからの身体の変わり目に立ちのぼる匂いを静かに描きとめた作品が、芸術学科・荒川凛子さんの卒業制作「性的嫌悪と『女』というプレッシャー」である。

▲ 荒川凛子「性的嫌悪と『女』というプレッシャー」

身体という器が変化する歯がゆさが創作の契機だということとは別に、凛子という変化しない固有名＝名札にもまた、性差にかかわる日本的な価値観が結びついているように感じられ、発表会でこのことを聞きそびれたと残念に思う一方、社会学を学んだものの習い性から、ものごとを勝手に解釈しがちな心根が野暮だと恥じ入るほどの秀作だった。

「子のつく名前」が尊ばれた戦前・戦後の一時期の代表的な価値観のひとつに近代家族イデオロギーがある。それは性別役割分業という理念とも密接に絡みあっていた。現代社会学科・石田恵蓮さんの卒業論文「特別視される同性愛と〈恋愛＝子孫繁栄〉言説」は恋愛の目的が子孫繁栄にあるとする言説が他の言説とどのように結びついているのか解きほぐしていく論攷である。ロマンティックラブや母性といった種々の神話が下敷きとなり、恋愛と子孫繁栄が等号で繋がれるとき、同性愛はその系の虚数項となる。排除の演算である。むろん、排除よりも包摂が求められることは理解しつつ、悩ましいところは、伝統的な価値観が動揺を来し、かような言説をよすがとする人々が決して少なくないこと。異なる価値観をもつもの同士、相互に認め合う方途を探ることが次の課題だと再認識させてもらえる発表だった。

価値観が揺らぎ、多様化する現代、女性を客体から主体へと転化させ、性差によらず、人間は客体であり、また主体でもあると示す試みが、科目等履修生（博物館学芸員課程）・西川春菜さんの展覧会企画案「Object ▶ Subject ～客体から主体へ～」、観覧者に価値観の互譲を求める企てである。垣覗される『源氏物語』の若紫を手始めに、神話や聖書の女性像、印象派の女性画が紹介される。「ファッションと女性」では、多様な女性の姿が示され、「台所と女性」は主体性を確立する場であった台所を会場に設える趣向である。来場者がみずからの属性を掲げ、ファッションショーよろしくランウェイを行き来することで企画は締めくくられる。M. フーコーに倣えば、客体として監視されることで主体は誕生する。主体の誕生と性別に繋留されて安定した近代的主体の動揺を追体験することができる企画である。



▲ 発表会のようす（画像一部加工）

フーコーは病・狂気について考古学を展開した。現代社会学科・中野夢菜さんの卒業論文「特定の精神疾患とジェンダー観の結びつきについて」は、メンヘラという現代日本に固有な人間のありようが女性性と結びついて語られる実相を描写したものである。精神疾患＝疾病、パーソナリティ障害＝個性、その弁別はひとまず措き、メンヘラという概念が、ある面ではかわいい女性の特徴の極相として、しかし恋愛において忌避される対象として、他者から名づけられ、そしてみずから名乗られる自己執行的な社会的カテゴリーとして機能していることが説明されている。メンヘラはまさに社会のまなざしによって生みだされたものである。そこにジェンダーとウェブ・SNS が深く関与しているという指摘は、近代的であり現代的であり、現代社会に対する鮮鋭な問題意識を感じた。

今年度の卒論・卒制発表会は、2021 年 1 月 13 日、Zoom ミーティングで開催され、以上 4 つの労作が披露された。参加者は発表者を含めて 23 名。活発な議論は、昨年度と同じく、とても勉強になるものだった。

（杉本昌昭・経済経営学部）

INFORMATION

自著紹介
『オスカー・ワイルド書簡集 ―新編獄中記―』（中央公論新社、2020年）

▲自著書影

本書は、オスカー・ワイルドが遺した膨大な書簡からその人生を画するものを選りすぐり訳出した書簡集である。ワイルドは、同性愛が有罪だった時代のイギリスで有罪判決を受けて二年を獄中で過ごした文学者である。ワイルドが獄中から恋人であり、また彼の失脚の原因をつくったアルフレッド・ダグラス卿に宛てて書いた長大な手紙は『獄中記』と題され、日本にも早くから紹介されていた。拙著では、この「獄中記」を中心に据えながらも、事件の発端からワイルドの死に至るまでのワイルドの人生を、書簡によって織りなされる一つのストーリーとなるように構成した。「新編獄中記」という副題には、先達の偉大な業績への敬意と、それを現代の知見や感性から構成し直したという新味を込めてみた。

悲劇の渦中にあったワイルドが、苦悩やら怨恨、そして抜きがたい愛情をいかなる言葉で表現したのか、そしてそのようにして紙に書きつけられた言葉たちによっていかにして救われたのか。それを味わって頂くのが拙著の醍醐味であろうと思う。悲劇のどん底にある人間の悲嘆や遺恨が、これほどまでに微に入り細に入り言葉で表現し尽くされているという例を、この書簡の他に、訳者は寡聞にして知らない。ワイルドの濃密な言葉を訳しながら、訳者自身も自分の中にある混沌としていたその種の感情を表出する経路ができてゆくような、奇妙にして新鮮な感覚を味わった。作品の中に散りばめられた有名な警句にも引けを取らない、ウィットに富む名言を、ワイルドの豊かな才は手紙であれども出し惜しむことはしない。それらを本書で多数紹介することができたのは訳者冥利に尽きることであった。

ワイルドの後半生を彼自身の筆になる小説でも読むようにして楽しんで頂ければ、編訳者としてそれ以上のことはない。また、ワイルドの減刑嘆願書などは、詳細な注釈を付し、同性愛史の資料としても役立てて頂けるように心がけた。漱石の『心』の中の「先生の遺書」から萩尾望都の『トーマの心臓』に至る我が日本語の言説空間の多くにまで、ワイルドの「獄中記」の端々が響きわたっているのに気づいたことは、うれしい驚きであった。

全世界が新型コロナとの戦いを強いられる前代未聞の事態に見舞われた 2020 年に拙著が世に出ることとなったのも、何らかの導きなのだろうか。新年度こそ、ジェンダー・フリー・スペースに学生さんたちの活気にみちた笑い声が戻ることを心から願っている。

（宮崎かすみ・総合文化学科）